

「相馬から弁護士を目指して」<sup>(※1)</sup>高普第 20 回卒 門 馬 博<sup>(※2)</sup>

時々汗をかいて「はっと」して真夜中目覚める事があります。法務省で行われる司法試験の発表が何故か相馬高等学校、や中村第一中学校の教室、廊下で行われて今年も合格できなかったという夢です。教えていただいた先生や友達がいっぱい校庭で騒いでいるのですが、私は誰にも見られないように学校から必死で逃げ出します。アー誰にも会わなくて良かったと思いながら自宅に帰ろうとするのですが、母親がいると思うと申し訳なく帰れません。本当に困ってしまいます。がっかりするだろうなあー。仕送りしてもらって悪いなー。何で合格できないんだろうなあー。もう 30 歳かアー、なんて思いながら「新開楼」あたりで迷っていると目が覚めます。アー夢かあー。俺は合格しているんだ！よかったあー！疲れる夢だなー。なんて思いながら事務所に出かけます。これと同じ様な夢は若い時ほどではないですが 58 歳になった今でも 1、2 年に 1 回は見ます。もう見ないなど安心していると天災の様に忘れた頃に又やってきます。合格した夢を見たいと思うのですがそういうことは何故か今まで 1 度もありません。

私が、弁護士になろうと思ったのは小学校（中村第一小学校）4、5 年の頃です。中学生になりその意志は益々固くなりました。近所に、丁子屋書店、広文堂書店があり弁護士という職業に関する本をよく立ち読みしました。司法試験の専門誌を意味もわからず読んでいたのですが、理解していた事はこの試験は最関門の試験で東京の大学にいかなければ合格出来ないということと弁護士には「不変の思想、信念」が必要であるということです。 …（中略）…

小学、中学、高校を通じ弁護士の基礎的素養はここ相馬で培われたと思っています。両親がいつも言っていた事は、どのような身分の人でもそれなりの理由があるのですからけして馬鹿にしたり、差別してはいけないということです。実家は時計、貴金属の商をしていましたが、両親は店先に来る物乞い、乞食のような人をも大切に扱っていました。その人が帰ってからも「ああいう人をけして馬鹿にしてはいけませんよ」「人間の価値は自分より弱い人にどう対応するかによって決まります」といつも母は話していました。私も、よく店番をさせられたのですが、素性の知れない寺田（仮名）さんという人が、実家の隣の渡辺食品店から 10 円で玉うどんだけを買ってきて私の実家からどんぶりどりと醤油、ハシを当然のように借りて店先でよく食事をしていました。 …（中略）… 母親が言うには、「寺田は身寄りがなくて困っているんだから助けてあげなさい。どんぶり、醤油ぐらいなんですか。店先でも客に見えなければかまいません。助けてくれる人がいないのだから可哀そうです。」寺田さんはその後事業で頑張って成功したそうです。それを知って母は「偉い、偉い。本当に立派な人は寺田のような人間です。」と話のごとに喜んでいました。 …（中略）…

両親の教えが今弁護士の原点です。 …（中略）…

高校を卒業し、上京する大雪の早朝、母親が玄関で見送ってくれました。「人生は思う通りにはいかないと考えていれば間違いありません。」「貴方は三男ですからあげる財産は何もありません。ただ、一人前になるまで学費を送ってあげますから東京で道を見つけなさい。」「この家はもう貴方が戻って来るところではありませんよ。」といわれ益々決意を固めて上京したのをはっきりと憶えています。

上京して、昭和 44 年明治大学法学部に入学しました。合格発表、入学金を振り込んだあとその足で、明治

大学基礎法学研究室を訪ねました。薄暗い部屋の中に法律の本が山積みされており身震いする想いでした。

… (中略) … 入室した同期が 60 人いました。指導する先輩の弁護士が来て最初に言われました。「この中で 3 人合格すれば上出来です。ゼロかもしれません。」3 人かアー。厳しいなあー。… (中略) … 結局同期 60 人から 5 人合格しました。5 人目が私です。… (中略) …

父は大学院を卒業する頃何も見届けずに亡くなりました。30 歳近くになり、次第にこの試験の本当の怖さがわかってきました。法務省で不合格の発表を見て声もなく母親に連絡すると、「そうかい、もうやめたほうがいいです。」「もう十分頑張りました。」「不合格でも私には関係ありません。一番辛いのはあなたですから、こう言われると何故か又闘志が湧いてくるから不思議です。

相馬に帰郷した時寝室で傍の母親に言われました。「ヒロシ、どうしても辛い時、どうにもならない時、思いつめてはいけません。ハトぼっぼでも、何でもいからそこで、知っている歌を唄いなさい。それを何回も繰り返すのです。歌を唄いながら考える事は出来ません。私はそうして生きてきました。」「ヒロシ。これがお前の歌だといつも思っています。」といて、畠山みどりの出世街道を教えてくださいました。歌ってみたら涙が自然に流れました。「やるぞ、みておれ口には出さず、腹におさめた一途な夢を 曲げてなるかよ、くじけちゃならぬ どうせこの世はいっぼんどっこ」「男のぞみを貫く時は 敵は百万、こちらは 1 人」。

それから今までも増して毎日 10 時間以上勉強しました。トイレの中も、電車の中も、歩きながら、食事をしながら、さらに狂人のように勉強しました。答案練習会終了後の講評では理解できるまで最前列で質問を繰り返し絶対に帰りませんでした (このことは今でも、当時の受験仲間だった弁護士から「異常」だったよと時々言われます)。酒も一切断ちました。体重が 13 キロ以上も痩せて高校の時と同じになりました。しかし、どうしても最終合格がきませんでした。… (中略) … たとえ相手が誰であろうと実力がないことを認めて頭を下げ、謙虚になって教えてもらうのです。… (中略) … 先ず、会社員である義兄から文章の書き方というものを教えていただきました。何千通も答案を書いてきたのにこんな基礎的なことが解らなかったのか。目の前の霧が晴れたようでした。それと 6 歳年下の石河弁護士という先生に初心に戻り基本原理を教わり答案を添削していただいたのです。… (中略) … 長期間の指導が終了し、石河弁護士から「よく我慢したね」と言われました。しかし、それでも最終合格は出来ませんでした。どうしてだろう。こんなに勉強してどうして合格できないのだろう。解りませんでした。私は、ついに不眠症になり夜と昼とが逆転してしまいました。そして昭和 56 年を最後に司法試験を諦め正式に仕事を探し始めました。初めて精神状態が落ち着き夜普通に眠れるようになりました。昭和 57 年どうしても諦め切れずにどうせ駄目だろうと思いつつながら何の準備もせずに受験したその年、何故かどういうわけか最終試験 (3 回) まで通ってしまったのです。理由は今でもよくわかりません。相馬高校を卒業して実に 14 年の歳月が経っていました。

最終合格を確認し喜んで法務省の公衆電話から相馬の母親に連絡しました。「そうですか、良かった。良かった。」と一言、それ以外特に何も言ってくれませんでした。

私が弁護士になった後で聞いた話ですが、母親は、私が最終合格できないと思っていたらしく、その後の再就職のためかなりの資金を預金準備していたそうです。その預金は、合格後私を除いて兄弟全員に分けてあげたそうです。本当に親とはありがたいものです。私を今まで迷うことなくお導きいただき、弁護士としての生きる指針を教えてくださいました天国のご両親様にこの場を借りて何度も何度も頭をたれて御礼を申し上げます。

(※1) 創立 110 周年記念誌『紅の旗』(2009(平成 21)年 1 月発行)「思い出の記」〈ああ、我らが青春の日々よ〉より

(※2) 昭和 43 (1968) 年卒、中村出身。丁字屋時計店。